

グローバル金融危機の中東欧経済への影響：  
ルーマニアとブルガリア・ラトビアとの比較を中心として

2012年7月18日

経済学研究科第516回例会

吉井昌彦

中・南東欧新規 EU 加盟諸国は、2004、07 年に EU 加盟が実現する中で、FDI を含めた資本流入が活発化し、高い経済成長を経験することができた。しかしながら、2008 年のリーマンショック後、ポーランドを例外としてマイナス成長を記録し、いくつかの国は IMF より支援を受けなければならなかった。

とりわけ、エストニア、ラトヴィア、リトアニアというバルト 3 国への経済的打撃は深刻であり、2009 年には 2 桁のマイナス成長を記録している。この経済的打撃の要因は、第 1 に、既 EU 加盟国からの過剰な金融資本の流入によって引き起こされた経常収支赤字、対外債務の拡大であった。第 2 に、金融危機に直面した大手金融機関がこれら諸国から資金を引き揚げた結果、対外債務の返済が困難になったことであった。第 3 に、バルト 3 国が固定為替相場制度を採択していたことであった。

これに対して、南東欧新規 EU 加盟国の一つであるルーマニアは、グローバル金融危機以前においては、バルト 3 国よりも経常収支赤字比率が低かったにもかかわらず、(バルト 3 国ほどではないにしても、しかしバルト 3 国と同じく固定為替相場制度を採択しているブルガリアよりも大きな) マイナス経済成長を記録し、また、IMF よりの支援を仰がなければならなかった。また、例えばエストニア等よりも経済回復の遅れは顕著であり、景気回復は 2011 年を待たなければならなかった。

なぜルーマニアの経済パフォーマンスは、他の中・南東欧新規 EU 加盟国よりも悪いのか、これを考えるのが本報告の主題である。

暫定的な結論としては次の 2 点を引き出すことができる。第 1 に、ルーマニアでは、景気拡大に伴い歳出を拡大させたため、景気後退期に入った際に金融・財政上の余裕を持つことができず、国際的金融支援を仰がなければならなかった。第 2 に、他の中・南東欧新規 EU 加盟諸国と比較して、ルーマニアの政治状況は不安定であり、景気後退・回復期において、例えばラトヴィアと比較して、一貫した政策をとることができなかった。